

戯曲の翻訳

——日本語のシェイクスピア、英語の世阿彌——

喜志哲雄 (京都大学)

KISHI Tetsuo

シェイクスピアの劇『オセロー』の大詰近くで、主人公オセローはヴェニスからやって来たロドヴィーコーに向って、ヴェニス当局に自分のことをこんな風に伝えてほしいと頼み、最後に自らを刺す。このくだりは原文では次のような台詞になっている——

And say besides, that in Aleppo once,
Where a malignant and a turban'd Turk
Beat a Venetian and traduc'd the state,
I took by th' throat the circumcised dog,
And smote him — thus.

— *Othello* V.ii.352-356

この一節を日本語に訳することはほとんど絶望的と感じられるほどに困難だが、それだけに、これは英語の戯曲を日本語に翻訳するという作業について考える場合にはまことに適切な例になると思われる。

さて、日本語の自然な語順に従うなら“thus”に該当する言葉を“smote”に当る言葉の前にもって来ることになるであろう。事実、代表的な日本語訳はほとんどそうなっている。たとえば、「この手で、その外道の犬の咽喉もとを引きつかみ、かうして刺し殺してやつたと」(福田恆存)、「その異教の犬ののど元を引っ掴んでこういうふうに刺してやつたと」(木下順二)、「わたしはその割札を施した犬めの喉首をつかんで、こんなふうに刺したと」(小津次郎)、「私はその犬畜生めの喉を引っつかみ、このように——刺してやつたと」(小田島雄志)といった風である。しかしこれでは演技に差障りが生じる。なぜなら“thus”は過去の殺人と現在の自殺の両方を描写する決定的な言葉であって、オセローの自殺はこの言葉と同時に決行されねばならないのであり、その後に言葉が続くのでは緊迫感が損われるからだ。もっとも坪内逍遙の訳になると、これ以上に問題が多い。このくだりの訳の全体を引用してみよう——

更に又、斯ういふこととお書き添へ下さい。其以前、アレッポーにをりましたところ、頭帛を被つとるトルコ人めが、無禮にも、ヴェニス人を打擲して我が國を誹謗いたした際、手前は其外道めの喉元を引っ掴んで、恰ど如是風に……

と隠して持つてゐた短剣で唐突に我が胸を刺して
突き殺しましたとお書き添へ下さい。

つまり「突き殺しました」の後で「とお書き添へ下さい」とオセローは言うのだが、これではすっかり間が抜けてしまう。もっとも、歌舞伎には切腹した人物が長々としゃべり続けたり、誰かが切腹しているのに他の人物は全く反応しなかったりといった場面がしばしば見られる。歌舞伎をよく知っていた逍遙はあるいはそういう演技を想定していたのかも知れない。

これに対して、菅泰男氏によるこのくだりの訳は次のようになっている――

それから、もう一つお伝え下さい。かつてアレppoウで
ターバンを巻いたトルコ人が、敵意をあらわにして
ヴェニス人を打擲し、その国をそしっているのを見て、
わたしはその外道の犬ののど元をひつつかんで
撃ってやりました、こう！

つまり、“smote”と“thus”の順が原文通りになっているのである。しかし、これにも問題がないわけではない。と言うのは、こうすると、「かつてアレppoウで」以下の文の全体がロドヴィーコーに伝えて貰いたい事柄であることが分りにくくなる、「かつてアレppoウで」以下と「お伝え下さい」との結びつきが明瞭でなくなるからだ。大抵の訳者が最後に「と」という一語をもって来ているのはこの点に配慮したからであるに違いないが、但しこうすると、原文なら全体が“thus”で結ばれることから生れる切迫感やある意味でのけれん味は薄れてしまう。

要するに、この台詞に関する限り、原文の語順は俳優の演技のあり方や劇的緊張感と緊密に結びついているのであり、それを異った統語法をもった言語で再現するのは極めて困難だということになる。

次に、『ハムレット』のいわゆる第三独白の冒頭を日本語にしたらどんなことが起るかを検討してみよう。この台詞は既に吟味したオセローの台詞と違って俳優が特定の動きをすることを想定してはいないから、語順にこだわることはさほど必要ではないかも知れない。しかし、原文がもっていながら日本語では失われてしまうものがやはりある。それは何かと言うと、曖昧さである。

まず原文を引いてみる――

To be, or not to be, that is the question:
Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take arms against a sea of troubles,
And by opposing, end them.

— *Hamlet* III.i.55-59

次にこの個所の日本語訳を三つばかり挙げる――

世に在る、世に在らぬ、それが疑問ぢゃ。残忍な運命の矢や石投を、只管堪へ忍んでをるが

男子の本意か、或は海なす艱難を迎へ撃って、戦うて根を絶つが大丈夫の志か？（坪内逍遙）

生か、死か、それが疑問だ、どちらが男らしい生き方か、じつと身を伏せ、不法な運命の矢弾を堪へ忍ぶのと、それとも剣をとつて、押しよせる苦難に立ち向ひ、とどめを刺すまであとには引かぬのと、一體どちらが。
（福田恆存）

このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ。

どちらがりっぱな生き方か、このまま心のうちに

暴虐な運命の矢弾をじつと耐えしのぶことか、

それとも寄せくる怒濤の苦難に敢然と立ちむかい、

闘ってそれに終止符をうつことか。

（小田島雄志）

さて、原文の最初に現れる“be”という動詞の意味が必ずしも明瞭ではない。語り手である王子ハムレットは自殺について考えているというのが通常の解釈で、別にそれが誤りだとは思わないが、しかしそれに限定するのは考えものであろう。その点、「このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ」という小田島雄志氏の訳はもとの曖昧さを割合によく伝えていると言えよう。しかしこの訳には単音節の単語が並ぶ原文のリズム感はない。そこへ行くと「生か、死か、それが疑問だ」という福田恆存氏の訳は名訳だが、他方、これがあまりにも明晰すぎることもまた否定できない。

次に“Whether 'tis nobler”以下のくだりだが、文法的にも意味内容から言ってもやはりに曖昧だと言うほかない。“Whether 'tis nobler”という語り出しを聞くと、おそらく聞き手は、あることが“noble”であることにおいてまさるのかが問題になろうとしている、つまり語り手は“Whether or not it is nobler”と言おうとしているのだと理解するのではあるまいか。しかし台詞を辿って行くと、実は語り手は二つの行動を比較してどちらの方が余計に“noble”であるかを論じている、言換えれば語り手は“Which is nobler, A or B?”という問いを発しているのだということが判明する。もちろんこのことは“nobler”という比較級の形容詞が使われていることによってある程度予想がつくかも知れないが、やはりこのくだりは、非常にとは言わぬまでもいづらか奇妙な構文になっていると言っても誤りではあるまい。そしてこの奇妙さはハムレットの思考の流れを反映しているのだと考えることはできないだろうか。ハムレットは前もって整理しておいた考えを開陳しているのではなくて、自分の思考の展開に応じて言葉を発していると理解した方が自然であろう。ところが、ここに挙げなかったものを含むおおむねの日本語訳は、最初から、“Which is nobler, A or B?”といったかたちの文を訳したようになっている。

更に、“Whether”から“end them”までの部分は「疑問」の内容を敷衍しているわけだが、これは文法的に言うと完全な文ではなくて名詞節である。しかし大抵の日本語訳ではこの部分は完全な文になっており、従ってハムレットの思考が秩序を保って淀みなく流れているという印象を与えらると思われる。福田氏が「どちらが」という最初の言葉を最後に「一体どちらが」というかたちで繰返し、いわば宙ぶらりんな文にしたのは、あるいはこのあたりに配慮したせいであるのかも知れない。

意味内容についても一言だけふれておく。“take arms”から“end them”までのくだりを、どの翻訳者も「苦難と闘ってそれを滅ぼす」といった意味に解している。それが誤りであるとは言わないが、そういう風に訳してしまったのでは、このすぐ後でハムレットが死を問題にすることとうまくつながらぬ。この2行は、人が苦難と戦うというかたちで自殺する、かつて日本でもはやされた表現を用いるなら《玉碎》することを述べている、自殺することによって逆説的に苦難を終らせることを語っているのだとする註釈者が少なくない。つまりこの場合にも、翻訳は原文よりも明瞭で整理されたものになっている。敢えて言うなら、英語のハムレットよりも日本語のハムレットの方が論理的に思考を進める、台詞が日本語に訳されることによってハムレットの人物像が何ほどか変るということになる。もちろん第三独白の冒頭だけをとってこういう断定を下すのは危険だが、私の指摘はおそらく誤ってはいないと思う。英語は論理的な言語だが日本語はそうではないなどと言う人が時々いるが、こうした例を見るとそれが軽薄な俗論にすぎないことがよく分る。一般に翻訳は原文の曖昧さを整理し、原文よりも明確に定義された意味内容を伝達すると言えるのではないだろうか。

果してこれは日本語の台詞を英語に訳した時にも認められる現象であるかどうかを検討するために、山崎正和氏の『世阿彌』とトマス・ライマー氏によるその英訳とを例にとってみたいと思う。

ここで取り上げるのは、世阿彌が仏像の首を斬ることを息子の元能に命じたのに、元能が二の足を踏むので、もう一人の息子の元雅にそれをさせるという場面である。原文と英訳とを並べてみる――

世阿彌 元雅、刀を持って。刀を持って、元雅。

元雅、登場。

元雅 お呼びでございますか。

世阿彌 む。そなたは観世の次の大夫だ。この御仏の首を落せ。

元雅 は？

世阿彌 立ちあひ能の面にする。お顔に傷をつけるなよ。斬れ。

元雅 (長い間) はい。

刀を構へる。

元能 母上、母上、なんぞ仰せられませぬか。仏罰は兄上にくだりますぞ。父上をおとどめくださりませ。

椿、無言。身じろぎもしない。

元能 父上、ごぞんじありませぬか。遠くは大樹様のおかくれ以来、近くは義嗣様の御敗北この方、観世の家には嵐がしのび寄ってをります。母上は、一家の安泰を祈って、この御仏に願をかけてをられました。けふがその結願の日。父上、これを聞いてもお祈りになりますか。

世阿彌 元雅、聞いたか。

元雅 はい。

世阿彌 (静かに) 斬れ。

ZEAMI: Motomasa! Bring your sword here! Motomasa!

(MOTOMASA enters.)

MOTOMASA: Did you call me, Father?

ZEAMI: I did. Remember, you are heir to the family and to its traditions. I want you to cut off the head of this Buddha.

MOTOMASA: What?

ZEAMI: It will serve as a mask in the nō contest. Don't mark up the face. Now cut!

MOTOMASA: (after a long pause): Yes, Father. (He takes out his sword.)

MOTOYOSHI: Mother! Mother! Can't you say something to make Father stop? The wrath of the Buddha will descend on him. Please. Please stop him.

(TSUBAKI says nothing. She remains absolutely still.)

MOTOYOSHI: Father, you must understand. Our family is in greater and greater danger. First because of the death of Lord Yoshimitsu, long ago, and now because of the defeat of Lord Yoshitsugu. Mother wishes only for the peace and tranquility of our house. She has been making prayers before this very Buddha for our safety. The term of her vow is finished today. Knowing all this, Father, do you still want to destroy the statue?

ZEAMI: Do you hear him, Motomasa?

MOTOMASA: Yes.

ZEAMI (softly): Cut.

室町時代の教養人がどんな言葉で会話をしていたかはかなり正確に分っていると思われるが、戯曲『世阿彌』は別にそういうものを忠実になぞっているわけではない。かと言って、それは現代の日常会話の文体で書かれているわけでもない。ある程度時代があった、型をもった、一種の人工的な文体が使われていると言っていいだろう。英訳も、非常に砕けた日常会話の文体を使っているわけではない。しかし、原文と現代の日本語の日常会話との距離と、英訳と現代の英語の日常会話との距離を比べたら、おそらく後者の方が短いと思われる。次に、原文では世阿彌と息子たちとの言葉遣いの間に際立った違いがある。しかし英語では、当然のことながら、父親と息子たちとはいわば対等のもの言いをする。

しかしここで注目したいのは、英訳で用いられている一見些末的なさまざまな工夫であり、またそれによって台詞に生じている微妙な変化である。たとえば英語版では、世阿彌は元雅に向けて「そなたは観世の次の大夫だ」に該当する台詞を語る前に“Remember”という一語を添える。この単語が伝えようとする語り手の気持は、原文では台詞の勢いにこめられている。「む」から「そなたは」への切替えは明瞭に言語化されてはおらず、いわば語り手の声音に委ねられているのである。しかし英語版では、この切替えがはっきりしており、また確かにその方が論理の流れが辿りやすくなる。あるいは、「立ちあひ能の面にする」という原作の台詞は世阿彌の意思ないし行動を述べたものだが、英訳では世阿彌はいわば一歩退いて自らの判断をほとんど客観的な事実のように述べている。もう一つ、元能のやや長い台詞だが、「遠くは大樹様のおかくれ以来」の文

の内容を述べる順序が英訳では逆になっている。日本語では、元能は「遠くは……近くは」と言う言い方で聞き手の期待感をかき立てておいた上で、決定的な発言をするのだが、英語では、まず決定的なことを言い、その後でそれを補強することを言う。どちらの方が迫力があるかは、議論の分れるところであろうが、むしろ、原文も訳もそれぞれ日本語と英語との修辞の自然なあり方に従っているのだと言った方が正確かも知れない。

こういう限られた例から直ちに何かの結論を導き出すことは避けるべきかとも思うが、私は、英訳の人物たちの方が積極的に修辞をもてあそんでいる、英訳の人物たちの方が相手を説得し、相手に自分の意見や判断を受入れさせようという姿勢を明瞭に示しているという印象を受ける。劇『世阿彌』は情緒的に書かれた多くの日本語の劇と比べると、色々な意味でかなり理窟っぽい作品だが、英訳は一層理窟っぽくなっているというわけである。もちろんそれがいけないというのではない。一般に翻訳は原文の言葉の裏にあるもの、原文の言葉に潜んでいるものを表に出す傾向があり、どんな言語による翻訳であってもこうした現象は認められるのではないかと言いたいのである。

いずれにせよ、翻訳という作業によってハムレットも世阿彌も、僅かにもせよ確実に変る。面白いのはそこなのだ。外国文学を日本語に、あるいは日本文学を外国語に翻訳する時には、何が失われるかを論じるよりもどんな変化が起るかを論じた方が現実的かつ建設的ではないだろうか。